

「願いと心を形に」

高岡・五位組 輪島市で炊き出し

能登半島地震で広範囲に被害を受けた富山から、より被害の大きい石川県に向けた支援の輪が広がっている。富山県高岡市の16カ寺で組織する高岡教区五位組（山岸智史組長）は「能登の皆さんにできることを」と、輪島市門前町で2月と3月に炊き出しを行った。

最初の炊き出しを行ったのは2月21日。僧侶6人と門徒3人が、門前町で避難所になっている諸岡公民館

と門前西小学校を訪れ、仏婦の人たちが準備したカレーライスやおにぎり、酢の物など計200食分を調理して提供した（写真）。

同組の支援活動を牽引する高岡市・長光寺の織田隆夫住職（70）は、輪島市や珠洲市などで土木事業に携わった縁で、地震の数日後から単独で現地の避難所を訪ね歩き、支援を求める声に耳を傾けてきた。「特に報道もされず、コンビニまで1時間もかかるような地域はボランティアも手薄で、震災からひと月以上経ってもなかなか温かな食事がとれない状況だった」と、門前町で炊き出しを行うきっかけを語る。3月11日に再度、同じ避難所で炊き出しを行った。

織田住職は「富山も、能登半島の方々に比べれば数や割合は少ないが、多くの家屋が被災しており、液状

化の地域も多い。しかし、私たちはまだ地域の中で助け合うことができている。

ほとんどの方が被災している能登の方々は助け合うことができえない状態だと思う。『能登の皆さんに何かできることはないのか』という、私たちの小さな願いと心を形にすることが力になっていくと思い、支援を行っている」と話す。

同組では「今後も炊き出しや瓦礫撤去などの支援を多くの僧侶、門信徒に声を掛けながら根気強く行っていききたい」と話している。

同組は、東日本大震災の被災地支援でも高岡教区の活動に積極的に参画。発災直後からの炊き出し、原発事故の影響を大きく被った福島県飯館村の子どもたちを富山に招く保養事業、お米支援、仮設避難所でのもちつき支援などに協力してきた。

